

スペイン語における -ANTE (-ENTE, -IENTE) 形の 意味論的分析：Cognitive Grammar の視点から⁽¹⁾

Análisis semántica de las formas -ANTE (-ENTE, -IENTE) en español:
en la perspectiva de la gramática cognitiva

森本 祐子
Yuko MORIMOTO

0. はじめに

スペイン語の派生形態素 *-ante* (異形態 *-ente*, *-iente* を含めて以下 *-ante* で表す) による語形成を、その意味構造に注目して分析する。もとの動詞の意味構造と、派生の結果生じる形容詞、名詞の意味構造の関係をより明確な形で記述する事が本考察の目標である。⁽²⁾

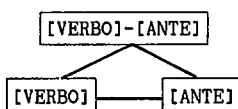
1. 概念構成の反映としての派生

Bosque も指摘するとおり、派生による語形成は、もとの語の意味と、派生語との意味関係が明白でない場合も多く、それぞれの派生形態素に適切な意味記述を与えることは困難である。⁽³⁾ *-ANTE* についても、*X-ANTE = (EL) QUE X*。(例：*brillante = que brilla*, *perteneciente = que pertenece* etc.) といった、ごくおおまかなパラフレーズが与えられるのが一般的であった。⁽⁴⁾ しかし、このような記述のみでは、派生によってどのような概念的な変化がもたらされるのかという疑問に答えることにはならない上、このパラフレーズで覆いきれない多くの語が取り残されてしまうことになる。

それぞれの言語形式に固有の意味構造を認め、統語的な形式の組合せも、それら意味構造の結び付きの反映であるとする立場からすると、たとえ意味的に不規則に見える派生語の意味も基本的には、もとの動詞形態素と派生形態素の意味構造の結合の上に成り立っているといえる。

派生という言語手段を、二つの概念をもとに、より複雑な概念構造を構築するものと考えることにより、派生語の意味構造を基本的にはそれらの構成要素、すなわち語幹形態素、派生形態素により表される二つの意味構造をもとに分析記述することが可能になる。図1は、この様な考え方に基づいてみた *-ANTE* 形の意味の基本的な内部構造である。派生に関わるそれぞれの形態素が固有の概念構造を持ったものである事、派生の結果生じる語の意味構造は、構成要素、それらの結びつきの上に成り立っているとはいえ、それ自身、独立のステータスを持つものである事を確認しておきたい。⁽⁵⁾

図 1



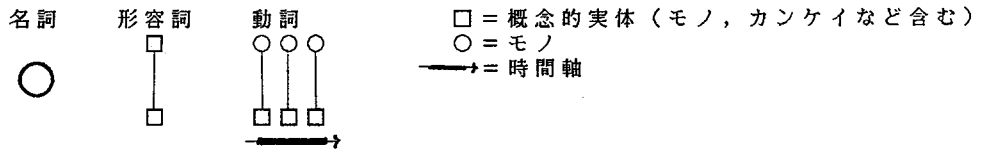
2. -ANTE 形の意味構造

2.1. 品詞の変化に伴う意味構造の変化

-ANTE 形の派生は動詞カテゴリーから、形容詞、名詞カテゴリーへの品詞変化をとともなう。ここではまず、派生による品詞の変化がどのような意味構造の変化によるものかを考えたい。

図 2 に示されているのは、Langacker による主な品詞の意味構造の一般的特徴を抽象的に図式化したスキーマである。⁽⁶⁾

図 2⁽⁷⁾



これらの図の意味するところは、名詞、形容詞、動詞カテゴリーはそれぞれ典型的には、⁽⁸⁾モノ、カンケイ、プロセスをその意味構造の焦点として持つという事である。モノとカンケイの意味構造は、プロセスと比較した場合、時間的な要素が必ずしも必要でないという点において、大きく異なっている。また、プロセスの意味構造は、時間軸上におけるカンケイの変化を捉えたものともいえ、カンケイの意味構造と組みモノの意味構造と対立関係にある。

これを、-ANTE 形派生に応用して考えてみよう。具体例として例文 (1), (2) をあげる。

- (1) a Esta misión *consiste* en llevar un maletín.
b (...) me había encomendado una misión *consistente* en llevar a Madrid un maletín. (EM)
- (2) a Juan me *visita* todos los domingos.
b La decoración era sobria, pero agradable al *visitante*. (EM)

例文 (1)a の *consiste* の意味構造が [CONSISTIR] というプロセスを指すのに対して、(1)b の *consistente* の意味構造は、同じ [CONSISTIR] を構造の基礎として持つなんらかのカンケイに焦点を当てている。また、同様に、例文 (2)a の動詞 *visita* の意味構造が [VISITAR] というプロセスであるのに対し、(2)b の *visitante* の意味構造はそのプロセスを構造の基礎として持つモノを焦点として持っているといえる。

Consistente, *visitante* いずれにおいても、語幹の動詞形態素がプロセスを表している事はいうまでもなく、これらの語の派生において、プロセスからモノ、プロセスからカンケイへの焦点の変化を担っているのは、派生形態素 -ante 部分の意味構造という事になる。すなわち、派生形態素 -ante の意味を [ANTE] とすると、それは、結合する相手の動詞の持つ動詞の特徴 (カンケイの時間軸上での把握) を解消し、無効にするような意味構造を持っているという事になる。⁽⁹⁾

2.2. -ANTE 形意味構造のスキーマ

以上において品詞の変換といった、従来、一般に形式的な視点からしか捉えられることのなかった変化も、派生形態素それ自身の意味構造によって説明され得ることを述べた。それでは、実際に、形容詞、名詞としての

-ANTE 形はどのような意味構造を持っているのだろうか。前節で述べた二つの特徴、つまり、構造の基礎として動詞の意味構造を持っている点。時間軸上での関係の把握から静的な、カンケイやモノとしての意味構造への変換を「ANTE」が担っている点以外に -ANTE 形全般の意味構造に不可欠な特徴をおさえ、-ANTE 形の意味構造の基本的なスキーマを示す事にしよう。

図 3

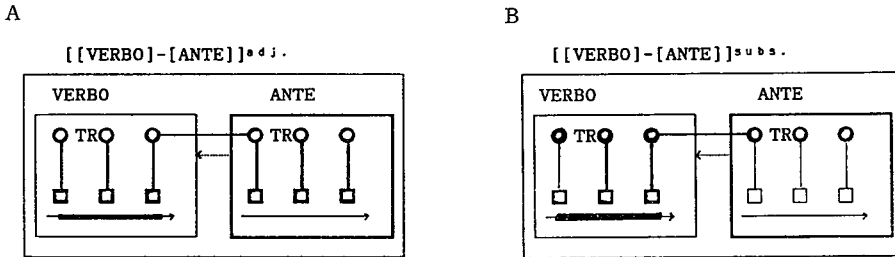


図3はそれぞれ、形容詞としての -ANTE 形と名詞としての -ANTE 形のスキーマである。

-ANTE 形固有の意味特徴は、図で示したとおり、基礎となる動詞の意味構造のうち意味的主語の役割を果たすモノを取り出す点にある。形容詞の場合はその意味構造内での、そのモノの他の要素とのカンケイに焦点を当て、名詞の場合はそのモノ自体に焦点を当てる。ここから、既に述べたとおり、ごく一般的にパラフレーズした場合 (EL) QUE X (X = VERBO) とされる意味構造が生じる。

この極めて抽象的なスキーマは、それぞれの語によって、微妙な差を生じながら具体化されるものである。動詞スキーマに具体的な語彙要素が当てはめられてはじめて派生形態素のスキーマもその意味効果を発揮する事が出来る。その意味において、派生形態素のより依存的な性質が確認される。

ところで、はじめに述べたとおり -ANTE 形の中には、(EL) QUE X (X = VERBO) といった一般的なパラフレーズから外れるものも多い。これらの語の意味をそれぞれ単独に記述し辞書に収めるのみでは -ANTE 形全体のつながりが見えてこない。これに対して、上にあげたスキーマをもとにして、それぞれの異なった特徴を持って具体的な語彙として実現されるという考え方をとることによって、一見、無秩序に見える派生語群の多様性も理解し易くなるはずである。以下において、スキーマを比較的矛盾なく具体化するような -ANTE 形を中心的メンバーと、また、それ以外のメンバー、つまり -ANTE 形全体の一般的な特徴から外れる点のあるものを周辺のメンバーと考えて、これらがどの様に -ANTE 形全体を構成しているかを見ていく事にする。

3. 分析可能性にみられる段階性

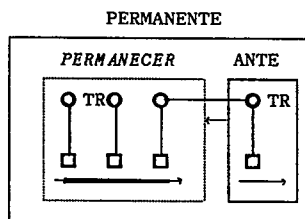
図4は、-ANTE 形を分析可能性のパラメーター上に並べたものである。ここでの分析可能性とは、派生など、複数の形態素からなる形式において構成要素が認識される度合いの事である。

図 4

mín.	ANALIZABILIDAD		máx.
<u>GRUPO A</u>	<u>GRUPO B</u>	<u>GRUPO C</u>	<u>GRUPO D</u>
[X[ANTE]]	[(X)-[ANTE]]	[[V]-[ANTE]]	([V]-[ANTE])
agente	ausente	ardiente	(neologismo)
elocuente	carente	balbuciente	
occidente	frecuente	brillante	
pariente	obediente	jadeante	
serpiente	permanente	errante	
...	

まず、-ANTE の中心的メンバーである C グループは、共時的にみて、派生もとの動詞が存在している -ANTE 形によって構成されている。これらにおいては、上述のスキーマのとおり、その構成要素である動詞形態素と派生形態素が問題なく認識され得るため既存の -ANTE 形としては最も分析可能性の高いものといえる。最も分析可能性の低いものとしては A グループがあげられる。これらの語はラテン語の現在分詞に由来するもののスペイン語において対応する動詞も同根の動詞も存在せず共時的にはほぼ分析可能性がゼロに近く -ANTE 形語群に含めるかどうか自体が問題となろう。しかしながら、Langacker も認めるとおり、同一の語尾のみによって他のメンバーとの共通性が認識されえないとも言いきれず、ここでは敢えてごく周辺のメンバーとして取り上げる事にした。¹⁰⁾ さて、これら、分析可能性に関して両極にある語群の中間的なものとして B グループで見られるような語が存在する。これらの語は、共時レベルにおいて厳密には派生もとの動詞を持たないが、同根の動詞が存在しており（例えば *obediente* に対して *obedecer*, *permanente* に対する *permanecer* のように）それとの関連において捉えられる事が十分に考えられるものである。Real Academia の辞書においても、これらの語のいくつかの意味を関連動詞を援用して既述している（例：*obediente*: que obedece; *permanente*: que permanece）。その様な動詞との関連において捉えられた場合、これらの語の意味構造は典型的な -ANTE 形のスキーマとは矛盾するもののその基本的な特徴を保ったものである。図 5 は具体例として *permanente* を *permanecer* との関連において認識する場合の意味構造を表したものである。

図 5¹¹⁾



4. 意味合成の不規則性

前章でみた分析可能性は、意味構造の不規則性のうち比較的形式的な問題に関わるものであった。この章においては、語彙的な意味における不規則性により関わりが深い、意味合成の不規則性に関して取り上げる。

これまでで繰り返し述べたとおり、すべての -ANTE 形は、語幹の動詞の意味構造と形態素 -ANTE の意味構造の結合を基礎として成り立っている。しかし、具体的な個々の語においては、様々な言語的、言語外的要因

がその意味の合成に関連している事が観察される。これは、意味構造のスキーマが具現化されるに際して、他の何らかの要素の影響を受け、スキーマからのずれを生じる事による。⁴³

-ANTE 形中心メンバーにおいてはその様なずれが見られず、意味の合成は比較的規則的なものであるが、周遍的なメンバーで大きなずれがあるものの中には、その意味をもとの動詞と派生のパターンのみから導き出すのはほぼ不可能という事さえある(例:VOLANTE のハンドルという意味のように)。

以下にあげた語は意味合成の不規則性の代表的な例をグループ分けしたものである。⁴⁴

Grupo A:

asistente	ayudante	cambiante
出席者	助手	両替商
comandante	comerciante	dibujante
司令官	商人	デザイナー
dependiente	escribiente	estudiante
店員	書記	学生
fabricante	navegante	presidente
製造業者	航海者	大統領
sirviente	teriente	
召使い	中尉	

Grupo B:

amante	aspirante	asaltante
愛人	候補者	強盗
combatiente	contrayente	creyente
戦闘員	婚約者	信者
examinante	mendigante	
試験官	こじき	
...		

Grupo C:

causante	demandante	firmante
被相続人	原告	調印者
litigante	recurrente	...
訴訟当事者	控訴人	

Grupo D:

absorbente	astringente	calmante
吸引剤	収れん剤	鎮静剤
excitante	desoxidante	...
興奮剤	還元剤	

意味合成の不規則性を導く要因として最も一般的に見られるのは、名詞化ともなる指示対称物の固定化であろう。つまり、ある指示物への安定した使用が繰り返されることによって指示の固定化が起こるもので、一般的にもよくみられる言語現象といえる。⁴⁴ 特に指示対称をヒトに固定した語彙は、職業、社会的カテゴリーを表す語彙として多くみられる(グループ A)。このような不規則性は、ごく自然に感じられる事もあり意識されにくいですが、例えば *estudiante* 「学生」が常に *el que estudia* 「勉強する人」とは限らない事によっても、このような扱いの必要性が確認される。これらの語においては、意味構造の焦点としての「モノ」が、「ヒト」に固定されているのみならず、その意味領域が社会的カテゴリー、職業とも言うべき範囲に限定されている点に特徴がある。B グループもほぼこれに準ずるものであるが、もとの動詞の性質上、職業や社会的カテゴリーという性格は薄い。C グループは、その意味領域が法律の分野に限られているものである。

ヒト以外への対称物の固定として、まとまったものとしては、D グループのように、薬品関係に限定されたものがあげられる。

また、これらのようにまとまったグループとしては取り上げにくいですが、それぞれに特殊な要素の固定化が見られるものとして *colgante* 「首飾りなど」、*corriente* 「水の流れ、電流、風潮など」、*creciente* 「上弦の月、上げ潮、イーストなど」、*menguante* 「引き潮など」、*pendiente* 「例斜面、耳飾り、ペンダントなど」、*rompiente* 「岩礁、砕ける波」、*volante* 「ハンドル、ちらし、メモ、はずみ車(機械の部品)、フリル、バドミントン、シャトル」などがあげられる。これらの語はそれぞれ、複数の限定を受けており興味深い。例えば *corriente* は、流れるモノの限定により、単独で、(河川などの)「水の流れ」、「電流」などを指し、流れる領域の特殊化として、*el mes corriente* (今月)に見られるような時間領域、「風潮」という意味にみられる抽象的な意味での社会領域

などへの投影、広がりを見せている。このような複雑な不規則性の発展は他の語にもみられる。¹⁰⁾ いずれにしても単に (EL) QUE CORRE, (EL) QUE PENDE, といったパラフレーズからはとても導かれられないような意味を示してはいても、その基本的な部分にスキーマによって示されたような動詞形態素と、派生辞形態素の意味の結びつきがある事がわかる。

5. まとめ

以上で、派生辞の意味記述や、派生という現象の捉え方自体に関するいくつかの新しい提案を含めながら、-ANTE 形の意味構造に関するいくつかの重要と思われる点をまとめてみた。

語の意味には、形式からのみでは捉ええない様々な要素が関連している事を認識しつつも、一貫して形式と意味との間の有契性を強調してきた。Manuel Alvar の言葉を借りていうなら、語の意味は、我々が世代を重ねて積み重ねてきた経験や、世界観の「宝箱」のようなもので、¹¹⁾ その分析記述は、いわゆる通時的な考察や「言語外」の要素を考慮する事なしにはありえない。¹²⁾ しかしまた一方、その様な人間の外界に関する経験的要素が言語にどの様に反映されているかを正しくつかむためにも、形式と意味の関係を完全に恣意的なものとして分析の可能性を否定することなく、さらに厳密な意味分析の方法を探っていく必要があると思われる。

注

- (1) Langacker (1987) による。同様の立場として池上 (1981), Lakoff & Johnson (1980), Lakoff (1987), Langacker (1982, 1984, 1988) などがあげられる。
- (2) -ANTE 形にはこの他に前置詞用法の確立したもの、前置詞をともない、副詞句を構成するものなどがあるがここでは考察の対称を形容詞、名詞に限る。
- (3) Bosque (1983): 121 頁参照。
- (4) Alemany Bolufer (1920), Caro (1920), Lang (1990), Real Academia Española (1959) など参照。
- (5) 4章で見られるように、意味の不規則性はこの二つの構成要素以外の要素が意味構造に影響を与える事による。
- (6) スキーマによるカテゴリーの捉え方に関しては Langacker (1987) 371 頁, Taylor (1989) など参照。
- (7) Langacker (1987 etc.) を参考にした。
- (8) この様な、品詞の意味的規定は、一つのカテゴリーに、そのカテゴリーの一般的な特徴を多く持つ典型的なメンバーとそれらの何らかの類似によってそのカテゴリーに属する周辺的なメンバーへの段階的な構造を認める事によってはじめて正当化されるものである。プロトタイプ理論の基本的考え方は、Rosch (1973), Rosch & Mervis (1975) など参照。
- (9) プロセスを基礎とするモノやカンケイの意味構造を持つ語は、勿論、-ANTE 形のみではない。動詞から、派生するその他の形容詞、名詞、また、いわゆる非定形動詞も全て同様の構造を持っていると考えられる。
- (10) 例えば、残りの部分が独立したステータスを持っていなくても、英語の father, mother や doctor に er/ore を、inept, cranberry に in, berry を認める事は充分に有り得る、という考え方である。Langacker (1987) 465-466 頁参照。
- (11) 動詞形態素の意味構造を破線で囲ったのは、その不安定なステータスを表すためである。
- (12) 複数形態素の意味からなる複雑な意味構造のスキーマからのずれに関しては Langacker (1987) 448-457 頁参照。
- (13) これらの単語の中には、比較的規則的な意味を含んだ複数の訳（意味合成において比較規則的な意味を含む場合も含めて）が対応しうるものも多いが、ここでは、それぞれのグループの特徴をよく表す訳を選んで付け加えるにとどめる。

- (14) 皮膚の色によって人種を表す例などがあげられる。
- (15) ここでは詳しく立ち入らないが、歴史的な視点から見るとさらに多くの例があげられる。(参考: Levante, oriente, occidente, serpiente などの語源的考察。Marouzeau (1910) などに詳しい。)
- (16) Manuel Alvar (1982) 11 頁。
- (17) この様な経験主義に基づく言語の研究の代表例として Lakoff (1987) などがあげられる。

参考文献

- Alemany Bolufer, José. *Tratado de la formación de las palabras en la lengua castellana. La derivación y la composición*. Madrid: Librería General de Victoriano Suárez, 1920.
- Alvar, Manuel. *La lengua como libertad y otros estudios*. Madrid: Ediciones cultura hispánica del instituto de cooperación iberoamericana, 1982.
- Bosque, Ignacio. “La morfología.” *Introducción a la lingüística*. Madrid: Editorial Alhambra, 1983. 115-153.
- Caro, Miguel Antonio, *Tratado del participio*. (1870). 5ªed. Bogotá: Instituto Caro y Cuervo, 1976.
- Geeraerts, Dirk. “Cognitive Grammar and the History of Lexical Semantics.” *Topics in Cognitive Linguistics*. ed. Tuzdka-Ostyn. Amsterdam: John Benjamins, 1988.
- Ikegami, Yoshihiko 池上嘉彦. 「する」と「なる」の言語学. 東京: 大修館. 1981.
- Lakoff, George. *Women, Fire and Dangerous Things: What Categories Reveal about the Mind*. Chicago: The Univ. of Chicago Press, 1987.
- Lang, M. F. *Spanish Word Formation: Productive derivational morphology in the modern lexis*. London: Routledge, 1990.
- Langacker, Ronald W. *Foundations of Cognitive Grammar (Volume I) Theoretical Prerequisites*. Stanford Univ. Press, 1987a.
- . “Noun and Verb.” *Language* 63.1 (1987).
- Marouzeau, Jules. “L’emploi du participe présent Latin a l’époque républicaine.” *Mémoires de la Société de Linguistique de Paris*, 16 (1910) 133-216.
- Real Academia Española. *Gramática de la lengua española*, 9ªed. Madrid: Espasa-Calpe, 1959.
- Rosch, Elenor H. “Natural Categories.” *Cognitive Psychology* 4 (1973): 328-350.
- , Carolyn Mervis. “Family Resemblances: Studies in the Internal Structure of Categories.” *Cognitive Psychology*, 7 (1975): 573-605.
- Taylor, John R. *Linguistic Categorization: Prototypes in Linguistic Theory*. New York: Oxford Univ. Press, 1989.

例文出典

- Mendoza, Eduardo. *El laberinto de las aceitunas*. 11ªed. Barcelona: Editorial Seix Barral, 1990. (略号 EM のついたもの)